

# 海の少年

小川未明

青空文庫



今年の夏休みことし なつやすみに、正雄さんまさおは、母さんかあや姉さんねえに連れられて、  
 江の島の別荘えのしま べつそうへ避暑ひしよにまいりました。正雄さんまさおは海うみが珍めづらしいの  
 で、毎日まいにち朝あさから晩ばんまで、海辺うみべへ出でては、美しい貝かいがらや、小石こいし  
 などを拾ひろい集あつめて、それそれをたもとに入いれて、重おもくなつたのをかか  
 えて家うちへ帰かえると、姉あねや妹いもに見みせて、だんだんだんだんたくさんさんにたまるの  
 を見みて、東とう京きやうへのおみやげみやげにしようしようと喜よろこんでいました。

ある日ひのこと、正雄さんまさおは、ただ一人ひとりで海うみの方ほうから吹ふいてくる  
 涼すずしい風かぜに吹ふかれながら波打なみうちぎわを、あちらあちらこちらこちらと小石こいしや貝かい  
 がらを見みつけながら歩あるいて、

「見みつかれしよ、見みつかれしよ、己おれの目めに見みつかれしよ。真しん珠じゆ

の貝かいがら見みつかれしよ。「といいました。

青々あおあおとした海うみには白帆しらほの影かげが、白鳥はくちようの飛とんでいるように

見みえて、それはそれはいいお天てん気きでありました。

そのとき、あちらの岩いわの上うへに空色そらいろの着物きものを着きた、自分じぶんと同じおな

い年としごろの十二、三歳さいの子供こどもが、立たつていて、こつちを見みて手招てまね

ぎをしていました。正雄まさおさんは、さっそくそのそばへ駆かけ寄よつて、

「だれだい君きみは、やはり江えの島しまへきているのかい。僕ぼくといっしよ

に遊あそぼうじやないか。」といいました。

空色そらいろの着物きものを着きた子供こどもはにっこり笑わらつて、

「僕ぼくも独ひとりで、つまらないから、君きみといっしよに遊あそぼうと思おもつて

呼よんだのさ。」

「じや、二人で仲よく遊ぼうよ。」と、正雄さんは、その岩の下に立って見上げました。

「君、この岩の上へあがりたまえな。」

しかし、正雄さんにはあまり高くてのぼられないので、

「僕には上がれないよ。」と悲しそうにいいました。すると、

「そんなら僕が下りよう。」と、ひらひらと飛び下りて、さあ、

いっしょに歌って遊ぼうよと、二人は学校でおそわった唱歌

などを声をそろえて歌ったのであります。そして二人は、べにが

にや、美しい貝がらや、白い小石などを拾って、晩方までおも

しろく遊んでいました。いつしか夕暮れ方になりますと、正雄さ

んは、

「もう家へ帰ろう、お母さんが待っていないさるから。」と、家の方へ帰りかけますと、

「僕も、もう帰るよ。じゃ君、また明日いつしよに遊ぼう。さようなら。」といつて、空色の着物を着た子供は例の高い岩の上へ、つるつるとはい上がりましたが、はやその姿は見えませんでした。

明くる日の昼ごろ、正雄さんは、海辺へいつてみますと、いつものまにやら、昨日見た空色の着物を着た子供がきていまして、「や、失敬つ。」と声をかけて駆け寄り、

「君にこれをやろうと思つて拾つてきたよ。」と、それはそれはきれいな真珠や、さんごや、めのうなどをたくさんにくれたの

であります。正雄まさおさんは喜んで、その日家ひうちへ帰かえつて、お母かあさんやお父とうさんに見みせますと、ご両りょうしん親しんさまは、たいそうびつくりなさつて、

「正雄まさおや、だからこんなけつこうなものをおもらいだ。え、その子供こどもはどこの子供こどもで、名なはなんといいいます。」と、きびしく問とわれたのであります。正雄まさおさんは、

「どこの子供こどもですかぞんじません。」と、ただ泣ないていました。お母かあさんは、

「正雄まさおや、もうこれからけつして、こんなものをおもらいでないよ。そして、さつそく明日あした、この品物しなものをその子供こどもにお返かえしなさいよ。」と、かたくいいきかされたのであります。

あ ひまさお  
 明くる日正雄さんは、また海辺へいきますと、もう自分より先

にその子供がきていまして、昨日のよりさらに美しいさんごや、  
 むらさきすいしよう

紫 水 晶 や、めのうなどを持ってきて、あげようといつて、

まさお まえ  
 正雄さんの前にひろげたのであります。正雄さんは、昨日の晩、

お父さんや、お母さんにしかられたことを思い出して、

「君、僕は昨晚、これをもらつていったので、たいへんに、お父

さんやお母さんにしかられてしまった。もう欲しくないから、昨

日の、もらつたのをも返すよ。」と返したのであります。

すると、空色の着物を着た子供は不審そうな顔つきをして、

「なんで、君のお父さんや、お母さんはしかつたんだい。」とき

きますと、正雄さんは、

「人<sup>ひと</sup>から、こんなものをもらうでない、行って……。」と答<sup>こた</sup>え  
ました。

すると、空<sup>そら</sup>色<sup>いろ</sup>の着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>を着<sup>き</sup>た子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>は、からからと笑<sup>わら</sup>つて、  
「陸<sup>りく</sup>の上<sup>うえ</sup>の人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>はみようだな……。」といいました。正<sup>まさ</sup>雄<sup>お</sup>さん  
は、不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>に思<sup>おも</sup>つて、

「え、君<sup>きみ</sup>、陸<sup>りく</sup>の上<sup>うえ</sup>つて、君<sup>きみ</sup>は、いつたいどこからきたんだい。」

「僕<sup>ぼく</sup>は、海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>に住<sup>す</sup>んでいる人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>だよ。」

「海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>にも国<sup>くに</sup>があるかい。」と、正<sup>まさ</sup>雄<sup>お</sup>さんは、まします不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>  
がつてききますと、

「君<sup>きみ</sup>はばかだな、海<sup>うみ</sup>の底<sup>そこ</sup>にりっぱな都<sup>と</sup>会<sup>かい</sup>があるのを知<sup>し</sup>らないのか  
え、陸<sup>りく</sup>の上<sup>うえ</sup>の家<sup>うち</sup>みたい、こんなにきたなくはないよ。水<sup>すい</sup>晶<sup>しょう</sup>

もめのうも拾い手が無いほど落ちてゐるよ。」

「そうかなあ。」と、正雄さんは感心してしまいました。

「君は、今年何年生だい。」と、海の中の子供がききますから、

正雄さんは、

「僕は高等三年だよ。」と答えました。

「僕は今年四年生だ。いちばん修身と歴史が好きだよ。君

は？ ……」

正雄さんも歴史は大好きなものですから、

「僕も歴史は好きだ。やはり海の学校の読本にも、壇の浦の

合戦のことが書いてあるかえ。」とききました。

「それはあるさ、義経の八そう飛びや、ネルソンの話など、先

生んせいからいつきいてもおもしろいや。」

「僕ぼくも、海うみの学がっこう校がっこうへいつてみたいな。」

「君きみ、来らいねん年ねんきたら連つれていつてあげよう。もう明日あしたから、僕ぼくの

ほうの学がっこう校がっこうが始はじまるから。君きみも晩ばんに東とうきよう京きやうへ帰かえるんだらう。

ほんとうに来らいねん年ねんの夏なつ休やすみには、また君きみもきたまえ。僕ぼくもきつ

とくるから、そして海うみの底そこの都みやこには、こんな真しん珠じゆや、紫むらさき水すい

晶しょうや、さんごや、めのうなどが、ごろごろころがっていて、建た

物ものなんか、みんなこれでできているから、電でん氣き燈とうがつくと、

いつでも町まちじゆうがイルミネーションをしたようで、はじめてき

たものは目めがくらむかもしれないよ。」

「じや来らいねん年ねんは、ぜひ連つれていつてくれたまえ。」と正まさ雄おさんは、

くれぐれもたのみました。

そのうちに日が暮れてきますと、西の海が真紅に夕焼けの雲を浸して、黄金色の波がちらちらと輝いたのであります。そのとき海の中に音楽が響いて、一個の大きなかめが波間に浮き出て、海の中の子供を迎えにきました。

「じゃ失敬！ お達者で、また来年あおう。さようなら。さようなら。」

といって、そのかめの背中に乗って、空色の着物を着た子供は、波の間に見えなくなつてしまいました。そしてまた波が、ど、ど、ど——ときて、砂の上に落ちていたさんごや、真珠や、紫水晶を洗い流していつてしまったのであります。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年文庫」

1906（明治39）年11月

※表題は底本では、「海《うみ》の少年《しょうねん》」となっています。

※初出時の表題は「海底の都」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海の少年

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>